

# 人間にできて、AIにはできないこと

ながれ

荒田 鉄二 (あらた てつじ/公立鳥取環境大学環境学部 教授)

今年に入った頃に生成AIが話題になっていたの、試しに使ってみました。その際の目的は、AIには何ができて、何ができないのかを探ることでした。このため、AIに少々意地の悪い質問をしました。

最初に質問したのは、経済成長に関することです。「有限の世界で無限の経済成長は可能ですか」と質問したところ、AIは物理学の教えるところから、「不可能です。」と答えてきました。しかし、それに加えて、「今後は環境容量の範囲内の持続可能な経済成長が求められます。」という回答がありました。そこで、「持続可能な経済成長であっても、成長が続けば、いずれは環境容量の限界に達してしまうのではないかと指摘したところ、途中のやり取りを省略すると、自身の回答の論理矛盾を認めたくなくて、最終的には「どんな形の経済成長であれ、無限の経済成長は不可能である」という最初の答えに戻りました。

続いて、「無限の経済成長が原理的に不可能であるにもかかわらず、なぜ経済成長が求められるのか」を質問したところ、「経済が成長しないと社会的混乱を招くからです。」という回答が返ってきました。

ここから分かることは、私たちの社会で議論が混乱している問題については、AIも混乱した回答しかできないということです。私たちは、有限の世界では無限の経済成長は不可能という物理的な現実と、資本主義経済は成長なしには存続できないという社会的要請の板挟みにあって、「持続可能な経済成長」という矛盾した概念を捻り出したわけですが、それは概念としては存在しても、現実の

世界で実現することはできません。これは、龍(ドラゴン)は「架空の存在」という形の「存在」を持ち、それについて考えたり、描いたりすることができても、現実の世界に龍の概念に対応する動物が存在しないのと同じです。私たちは「持続可能な経済成長」について、あれこれ考えたり、議論したりすることはできますが、だからと言って、それが現実になるわけではありません。

次に質問したのは、「因果法則」と「選択の自由」の関係です。「この世界が原因と結果の因果法則から成り立っていることと、人間が選択の自由を持つことは、どのようにして両立し得るのか」を質問してみました。これについては、哲学の世界においても決定的な答えには辿り着いていないとした上で、「物質的な存在は因果法則に支配されるが、非物質的な存在である人間の精神は因果法則には支配されない」という、物質と精神の二元論に基づく回答が返ってきました。そこで、「完全に物質的な存在であるコンピュータは因果法則の支配下にあるはずであり、このことは精神を持ったAIを作ることは不可能であるということの意味しているのか」と質問したところ、「絶対に」というわけではないという留保を付けた上で、「その通りです。」という答えが返ってきました。それならばということでAIの限界を確認するために、「人間にできて、AIにはできないことは何ですか」と訊いてみました。すると、次のような答えが返ってきました。  
**「人間にできて、AIにはできないこととして以下のようなものが挙げられます。」**

・経験や感情を持つこと：AIは人工的な存在であり、経験や感情などの意味や意図を持

つことはできません。

- **自己意識を持つこと**：AIは人工的な存在であり、自己意識を持つことはできません。
- **自由な意思決定をすること**：AIは人工的に設計されたアルゴリズムやモデルに基づいて動作します。意思決定には自己の意図や意思が含まれないため、自由な意思決定をすることはできません。
- **人間の様な柔軟な対応力**：AIは人工的に設計されたアルゴリズムやモデルに基づいて動作します。人間の様な柔軟な対応力や創造力を持つことはできません。

これらは人間にしかできないことの一部であり、現在の技術や知識に限界があるものです。」

この回答はある意味、予想の範囲内でした。それは以前読んだ『人類の歴史とAIの未来』（バイロン・リース著）という本に、人間の意識がどのようにして発生しているのか、そのメカニズムが全く解明されていないため、それをコンピュータ上で再現することもできないと書いてあったからです。

ここから分かることは、AIはどこまで行っても路線検索ソフトのようなもので、行先(目的)は人間が決めるしかないということです。

このようなAIの限界にもかかわらず、AI議論が過熱しているのは何故でしょうか。STAP細胞騒動は、どこかの投資グループがバイオ関連企業の株価をSTAP関連株としてつり上げ、嘘がバレる前に高値で売り抜けたという投資詐欺のようなもので、担ぎ上げられた研究者もそのことが分かっていなかったという話があります。今回も、IT関連企業の株価をAI関連株としてつり上げ、高値で売り抜けるというマネーゲームが世界規模で行われているのではないかと疑っているのですが、いかがでしょうか。

「AIが未来を切り拓く」というようなことが言われたりもしますが、私は、AIは後ろ向

きとは言わないまでも、少なくとも未来志向の技術ではないと考えています。今日の経済では交換価値としての「お金」が重視され、その物差しであるGDPを増やすことを目的とした経済運営が行われています。しかし、人間が生きていく上で本当に必要なのはモノの使用価値です。私は、持続可能社会の経済は、使用価値中心の経済になっていくと考えています。銀行の信用創造機能を通じて生み出される負債としての「お金」は複利の法則に従って無限に増えていくことができますが、現実世界における使用価値（こちらは負債に対して「正の価値」ということができるでしょう）を持ったモノが無限に増えていくことはあり得ません。AI技術は、バーチャルの世界での交換価値としての「お金」を増やしていくことには非常に親和性の高い技術かもしれませんが、現実世界での使用価値を持ったモノを生み出していくことにどれほど役に立つのでしょうか。近頃は小学校からAI対応の教育をしようということが言われているようですが、それよりは、自分自身の筋肉と道具を使って使用価値を持ったリアルなモノを作るトレーニングをした方が、将来的にはずっと役に立つのではないかと考えています。私たちは、生物界の一員として、リアルな世界で生きていかなければならないことを忘れてはいけないと思います。

生成AIを使ってみて、影の部分として感じたことは、AIを使う人間の側の変容です。私も相手が生身の人間だったら、相手の矛盾をとことん問い詰める質問はしなかったと思います（うちの奥さんには、AIをいじめるような質問をして趣味が悪いとたしなめられました）。AIが人間を脅かすことになるのではという心配がされていますが、自分自身の経験として心配になったのは、感情のないAIとの対話に慣れるに従って、人間に対しても同じような議論の仕方をしてしまうかもしれないということでした。